



見学者と展示者が交流する場所も

を行うサロンとして開放している。さらに、鈴木さんは別の思いももっている。自分自身の再発見につながる場所になりたいということだ。たとえば、作品展あるいは演奏会の終了後、作者や演奏者を交えてトークショーをする。そのトークショーには鈴木さんも登場し、進行役・聞き役を務めることがある。すると、様々な人と話をすることによって、自分自身にも再発見があるというのだ。

「年をとって、このまま生きていっていいのかという不安があります。だから、自分を新しくしていく場所にもしたい。そして、演奏者や展示した人にも、それを見たり聞いたりしてきた人にも、同じように自分を再発見する場所として使ってもらいたい。それがサ

ードプレイスの役割かな、と思っています」。

現在、企画は月1回、1週間程度の割合で開催されている。可喜庵側で企画する場合と、持ち込み企画とが半々程度だ。本業は家づくりだから、建築関係者にパネル

## 家は家族と地域の記憶

鈴木さんはイギリスにいたころ、何世代にもわたって古い住宅が住み続けられていく様子を見てきた。そして、古い家に住むということは、残された歴史や記憶を必死でつないでいるようなものなのかもしれないと思うようになった。可喜庵のあたりも、昔はもったいひ茅葺き屋根の家がいくらでもあったが、みな新しい家になってしまった。それはつまらないと思う。鈴木さん自身も古い家で生まれ育ったことや、新築を主体とした家を作る仕事をしていることの反動からか、「古い家を壊してしまふことは、記憶に残る時の流れというものを、いっさい断ち切ってしまうように思える」のだ。

ただし、今後もその思いをとげることが難しい。最後に、ご自身のお子さんには、この茅葺き屋根

やスライドを使って話をしてもらおうような暮らし方の再発見企画も充実させていく予定だ。

取材当日、近くに彫刻のアトリエをもっているという美大の講師が来ていた。鈴木さんは、さっそく「展示と音楽やトークショーを

の古民家を維持してもらいたいと思いますか、と聞いてみた。返事は肯定でもなく、お父さんが鈴木さんに昔言ったように「もう壊してもいい」というものでもなかった。そこには複雑な事情がある。

一つは相続税の問題だ。維持するには日本の相続税は高すぎる。果たして、相続が可能かどうか。もう一つは、都市計画の問題だ。昔は郊外ののどかな里山だった鶴川あたりも、今は、大きな道路が通り、マンションや戸建て住宅が立ち並ぶ住宅地となった。新宿まで40分という理想的な通勤圏だ。

可喜庵の茅葺き屋根も、以前は小田急線の車窓から見えたというところ。ところが今では、線路と可喜庵の間に真新しい分譲住宅が建設中で、すっかり見えなくなってしまう。加えて、線路と反対側、可喜庵の

ジョイントさせて、一緒にやろうよ」と、嬉しそうに声をかけた。次の企画に一番わくわくしているのは鈴木さんのようだ。

■可喜庵

<http://www.suzuki-koumuten.co.jp/indexkakan.htm>

前を通る世田谷通りは、今後、倍以上に広がることになっている。そうすると、奥の部屋が半分以上なくなる。かなり昔から計画されていたにもかかわらず、財源不足でいっこうに進まないらしいが。たぶん、この建物は残したくても残せないだろうという思いと、それがいつになるか分からないという理由で、鈴木さんの気持ちも定まらないのである。2009年の葺き替えが可喜庵最後の茅葺き改修になってしまふ可能性もないともいえないのだ。それでも、「財政がよくならないことを願っているんだけど（笑）」という言葉からは、やはり残せるものなら残したい、継続してもらいたいという気持ちも伝わってくる。

鈴木さんは、自身が手がける新築住宅にも、住む人の心に記憶となる何かを残すことができると考えている。